

海鰻莊奇談

岸田理生

プロローグ

画廊を思わせる舞台空間。正面には、一枚の絵額がかけられている。

(舞台前面には、金属製のシャッターが降り、張出しが作られている)

そこに置かれた一脚の椅子——中に水が入り、魚の泳いでいるのが見えるウォーターソファである。——

天井からは陽気な色の木の魚たちのモビールが下がり、どこからともなく吹き込んでくる風にゆらゆらと揺れている。

絵に描かれているのは、奇怪な魚の腹中にいる一人の娘と一人の少年の姿である。

薄青に牛乳をたらし込んだ色硝子の大正。

白髪の洋画家、藤島光太郎画伯が、まるで椅子に誰か座っているように話しはじめる。

画家

お聞きになりたい、と仰言る？あなたもですか？……そうでしょうね。

成程、私の髪は老人のように白髪で、その癖、年は三十だ。なぜこんな

髪になったのか聞きたいと仰言るのも無理はありません。えっ？いや、

話したくないと言うんじゃないやありません。お話ししますよ。と言うより、

私は語りべなんです。……私は地獄巡りをした……。どんな？地獄？

……大正という時代にふさわしい地獄です。あの出来事は煙になって消

えて行く海の水の色そのままだった。ところであなたは、塚本剛造とい

う名を耳にしたことはありませんか？ええ、塚本博士のことです。日本

の水産学界、特に応用漁業の分野では押しも押されぬ権威で、三十

噸級の蟹工船を何百隻もカムチャッカに出漁させている日華合弁の水

産商会の社長。ええ、あの塚本博士です。三年前に亡くなられましたが

ね。三年前……の……夜。その日は、博士の御令嬢、真耶さんの誕生日
だったんです。

藤島の背後で、ゆっくりとシャッターが上がって行く。
それにつれて発光しはじめる絵。

幾つものドアと、幾つもの踊り場を持つ階段状の舞台。両側には回廊があり、背後は三メートルの高みになっている。

(装置図を入れる)

中央には、透明な水槽。テーブルとなっている。その中では魚たちが泳ぐ。祝宴の用意がなされているが、客たちはまだ来ていず、塚本剛造、藤島光太郎、富川孝一、福山清の四人だけがいる。

(藤島と富川に) 紹介しよう、五美雄の受持の福山先生だ。
はじめまして。

(福山に) こっちは、洋画家の藤島君と、私が持っている臨海実験所の主任、で魚類学者の富川君だ。

よろしく。

五美雄さんは、幾つになられました？
十三才だ。

真耶さんとは五つ違い……。

ああ。(福山に) あの子は、手のかかる子かも知らんが、よろしく導いて欲しいね。

五美雄君は中華の混血児とうかがってますが……。

そうだ。あの子の母親は、人外境の住人だった。西藏(チベット)から中国奥地の重慶に入って百里、すると揚子江と嘉陵江の交流点に出る。

博士 福山 博士
博士 福山 博士
学者 博士 学者
画家 博士 画家

福山

そこからさらに東へ百里の谷あいには山住みの一族がいる。私は、そこであの子の母親を見つけたんだ。李娥、と言った。大きな硝子鉢に紅色の鯊（はぜ）を飼い、その虹色の明暗で吉凶を占う娘だったよ。虹色の鯊、ですか？

怪訝そうに訊く。

学者

本来、鯊という小魚は泥色をしたもの以外にはないのですがね、その鯊ばかりは七色の彩うつくしい、童話の国にでもいそうな、優しい魚でした。

画家

童話の国、か。君もなかなか詩人じゃないか。

学者

あんたが殺風景なんだよ、画家にしてはね。

画家

（苦笑する）

学者

五美雄さんの名は、鯊の拉典名ゴビオからつけられているんです。

博士

私は愛憎にはがむしゃらな性格だ。李娥と出会い、どうしても欲しく

なっただよ。彼女の一族は私たちのために、祝いの宴を張ってくれた。……松明は音を立てて燃えた。小熊の焙肉、雷鳥の串焼、魚（ちようざめ）の卵の油漬、きぬがさとみずくらげの羹……、さまざまな喰い物が次々と私の腹に納まっていった。酒は四川の秘酒。こいつは男にも女にも、まったくよく効く酒だった。宴たけなわに華やぐとき、李娥は一糸纏わぬすっぱだかで剣を手に乱舞した……。私の五感は、その姿に捧げられていたよ。見事な生き物がそこにいた。……ちよつと失礼するよ。客が来たようだ。

塚本、出て行く。

画家 不可解、と言う顔をしていますね。

福山 えっ？

画家 きょうは、五美雄君ではなく、真耶さんの誕生日なのに。

福山 ええまあ。

画家 少し真耶さんに関する知識を授けましょうか。

学者 でもって片想い連盟に入会させようって腹かい？

福山 片想い連盟？なんです、それは？

学者 我等兩人、恥ずかしながら手も足も出ない為体でね、真耶さんにぞっこ

福山 んなのさ。不思議な生き物にね。

画家 彼女には、もう会いましたか？

福山 いゝえ。

画家 だったら会わずにお帰りなさい。その方が結句、幸福だ。

学者 いや、是非会おうといゝ。会わずに幸福なぞと、つまらんですよ。会って

福山 不幸の花いちもんめ、という方が人生です。

画家 この男はね、生涯、娶らぬと誓いを立てて、夜になるといかがわしい場

所に出没するんです。でもって女たちを抱く。魚を扱うのと同じ手付き

福山 でね。

学者 この男はね、生涯不犯の誓いを立てて、真耶さんを眼で犯し、夜になる

福山 と彼女の絵を描くんです。まるで手淫の手つきでね。

福山 塚本博士は李娥さんを手に入れたのでしょうか。だったら、あなた方に

だって、その娘を妻にすることは可能だ。

画家 真耶は李娥さんの娘じゃありませんよ。彼女の母親は恵美、と言いました。十六才で博士に見染められて、十八才で嫁ぎ、ところが……、

学者 恵美さんは、そのときにもう孕んでいた。但し、別の男の子をね。

画家 博士がベルリンの学会に出席している間に恵美さんは出産し、夫が帰国する前日、愛人と手に手を取って出奔した。

学者 そして、死んだ。汽車の脱線事故だね。博士は、すべてを知って真耶さんを育てた。自分の娘としてね。

画家 と、いう訳です。

学者 そう、と、いう訳ですよ。

二人、ふと顔を見合わせて口をつぐむ。
溶暗。

そして回廊に明りが入ると、透ける紗越しに全裸の真耶が立っている。

その姿が幻のように浮かび、消える。

上手回廊に塚本博士が、下手回廊に真耶がいる。

真耶は、さまざまな衣裳を次々と体に当て、誕生日の装いを選び、その姿を塚本博士は愉悦の眼で見つめている。不意に、

真耶 狩りに連れて行く、と誘って下さった時のこと、覚えている？

博士 おまえは十だった。

真耶 あなたは猟銃を持つてはいなかった。私、不安になったわ。

博士 なぜ？

狩りの獲物は私かも知れない、と思ったから。あなたは素手で私を殺せるから、素手でしか私を殺さない筈だから。

やさしく首を締めて？それとも、十の子供には大きすぎる手で鼻と口をふさぎ、窒息させてかね？

どちらも愛撫に似ているわ。

私は十のおまえを殺そうなどとは思ってもいなかったよ。それでは一方的にすぎる。

川に行ったのだったわ。夕方だった。雲の切れた空のすそが夕焼けに染まっていた。すわれ、と、あなたは命じた。木立ちの影が私の足許に落ちていたわ。

覚えているよ。私は訊いた。「何がきこえる？」

真耶 「何もきこえない」と答えたわ。

二人、過去の時間の中へ入って行く。

博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶

くりかえそうか？

ええ。

目をつぶるんだ。

はい。

何がきこえる？

川の音。

耳をすますんだ。

私たちが、黙って座っていた。すぐ隣にあなたの体があった。とてもあい

まいな感覚だった。ただ空間が満たされていることだけは、わかった。

それから突然、いろんな音がきこえてきたわ。

何がきこえる？

啼いているわ。

鴉さ。

追いかけている。

カケスだ。

遠くで歌っている。

牧場ドリだよ。

チーチーと……、

雀。その他には？

それだけ。

横になるんだ。

はい。

博士

真耶

博士

真耶

博士

真耶

博士

真耶

博士

真耶

博士

真耶

博士

真耶

博士

真耶

博士

真耶

博士

さあ、何がきこえる？

風……。さわさわと草を揺らせている。頭の上で枝がかすかに呻きを洩らしている。それから、何かが怒っている。

リスだよ。

きこえるわ。

何が？

規則正しく脈打つ音……。私の血管を流れる血の音。

もうひとつ。

きこえないわ。

自分の内側に沈んで、五感をひろげるんだ。自分の知覚をあやつるんだ。

あるひとつの距離に耳をすまし、それ以外は無視する。それから距離を

変える。次々に変える。そうして意識を近くに引き戻す。最も近い場所

に。心臓に……。何がきこえる？

……。あなたがきこえる。

これが狩りだよ。

そうやって教えて下さった。

おまえは十六になった。

二年前。あなたは十六才の私に言った。

服をお脱ぎ。

あなたは裸になった私を見つめた。

憎しみを新鮮にかきたてるために。

私の体は、十八才の母をよみがえらせていた。あなたは私に教えたのよ。

おまえはわたしのほんとうのこではない。

真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士 真耶 博士

では、だれのこなの？

あくまのこだ。

おかあさまはあくまとけっこんしたの？

そうだ。わたしはおまえをにくむ。

どのくらい？

ころしたいほど。

あたしはころされやしない。

どうして？

だって、あたしはあくまのこだもの。

わたしはころす。

だったらわたしもあなたをころすわ。

それはじゆうだ。おぼえておこう。

では、いまから、てきとてき。

そして、あくまとあくま。

あたしがじゆうはちになったら、

そのときにこそ、

ころす。

ころす。

それまではひみつに。

やくそくする。

あたしはまけたくない。

ちかいをたてよ。

はい。

真耶、右手をあげ、間を置いて笑い出す。

真耶　　今日私は十八になったわ。

断切られるように暗転。

暗黒の中に流れ込んでくる円舞曲。

平手打ちの明りがつくと、踊り場を埋め尽すように客たちがいる。大正絵巻。

藤島は伯爵夫人（風）とワルツを踊っている。

風 なぜここを〈海鰻荘〉と呼ぶか御存知？

画家 ええ、勿論。最初こゝには名なぞついてはいなかった。ところがある日、博士がプールで「うつぼ」を飼いだしたんです。

風 うつぼ？

画家 鰻に似ているみにくい魚ですよ。顔の獰猛な、歯の鋭い、黄色と茶色がいりまじった肌には斑紋のある、生き物です。

風 あまり想像したくないわ。

画家 そのうつぼを海に放つて、郵便局長が海鰻荘と名付けたんです。鰻はマンと読みますからね、海鰻、つまりうつぼを飼う館です。

富川は、断髪のモガ（花）と話し込んでいる。

学者 海鰻荘はね、花嫁を迎えるための地上の天国に作られたんです。

花 天国ですって？地獄のまちがいじゃなくって？

学者 残念ながら天国です。プールの深さは一番深いところで十米、周囲の浅い所で一米、幅五百米、奥行百米ですから、面積にして一万坪。

花 おまけに温室で、周囲も天井も全部硝子張りと言う訳ね。贅沢だわね。

学者 数千種の蘭がありました。プールでは南の海の魚たちが泳いでいた。

花
学者

花なぞ、どこにもないわ。

花嫁が死にましたから。そのとき、博士は天国を地獄に変えてしまった。かつては熱帯魚の群を放って、妻を祝福したプールに、この世で最もみにくい魚を飼ってね。

花
学者

恵美さん、でしたっけ。
ええ。

福山は女優鬚のカフェの女給（月）と話している。

月

恵美さんのあとに来た李娥さんは、うつぼの池で泳いだの。それも裸でよ。何も着ずに、よ。

福山

見たんですか？

私、十五才だったわ。十四年前だった。美しい、と、そのとき思った。博士はね、李娥さんのために、昔の楽園を再現させてもいゝと考えていたのですって。でも、あの夜、ふつつりと断念した。

福山

なぜ？

李娥さんには、ふさわしくないからよ。彼女は、死と隣合わせの表情で、みにくい魚の群れをかき分けながら泳いでいた。そう言う人だったの。

風が踊りやめて、

風
花
月

でも、今は恵美夫人も李娥さんも死んでしまった。うたかただわ、天国も地獄も地上にある限り。淋しいじゃありませんか、空しいじゃありませんか。

風 悲しみの塊を食べて、飲んで、博士は何を考えているのかしらね。

と、突然、藤島が、

画家 ハッピーバースデー、真耶さん。

叫ぶ。

博士に腕をあずけ、バージンロードを歩くようにして真耶がやってくる。

客たちが一斉に拍手する。

呆然として見惚れていた福山は、藤島に肘で小突かれて慌てて拍手に加わる。

音楽が高まり、人々は踊りはじめる。

真耶、塚本、福山、藤島、富川の五人は水槽のテーブルに着く。

塚本 誕生日おめでとう。

真耶 ありがとう。

一同、乾杯する。

真耶 夢を見たわ。

画家 どんな、夢？

真耶 笛吹きになった夢よ。

私が笛を吹くと、あっちの家からも、こっちの家からも子供が出てきて、私についてくるの。ふり返ってみれば、何千人もの子供たち。

学者 それで、その子供たちは、どうなったんです？

真耶 魚に変わったわ。虹色をした小さな魚になって、嬉し気に楽し気にプール

の中で泳いでいた。

博士 虹色をした小さな魚……？

真耶 ええ。

真耶の話の間に白服のボーイが水蜜桃を運んできて、卓に置く。
と、真耶、塚本の二人を除く全員がストップモーションとなる。
その中で、

真耶 すいみつとうよ、めしあがる？

博士 ほしくはないよ。

真耶 こわいの？

博士 いま、ここで、しにたくわないのだ。

真耶 どくは、はいつていません。

博士 なぜそういうことをする？

真耶 あたし、たべるから、いきをかいで。

博士 あゝ。

二人、くちづけをする。

博士 えみのくちちのおいだ。

真耶 にくい？

博士 にくい。

真耶 ころす？

博士
真耶
博士

ころす。
いつ？
もうじき。

真耶が、ゆっくり笑って水蜜桃にかぶりつくと、それを合図に客たちが動きはじめる。

藤島と富川は立上って客たちにまじる。
福山だけが凍りついたように座っている。

風花風

うつぼって、海にいるのでしょうか。
ええ、多分ね。
プールで飼ったりできるものかしらね。

と、客の一人、漁師の辰爺が、

漁師

先生さまは、うつぼを淡水で飼うことに成功なさったんだ。

月

たんすい、って、なに？

漁師

海水じゃない水のことだ。

学者

海鰻荘のプールで飼われているうつぼは自然種よりも発育がいゝ位ですよ。

漁師

そうだ。海じゃ、一米のうつぼは化物だが、ここじゃ五米近くのもものが、

風

でも餌は？

漁師

大きい蟹を喰わせてるんだ。あかまんじゅうをね。

花

どの位の数がいるの？

学者

ざっと五千匹。

風

五千匹？

花

この世でいちばんみにくい魚が五千匹？

叫ぶ。

それを合図に静止。

その中で、

真耶

にくいの？

博士

にくい。

真耶

ころすの？

博士

ころす。

真耶

いつ？

博士

こんや。

暗転。

上手回廊に、風、花、月の三人が、下手回廊に、藤島、富川、福山の三人がいる。

あんまり贅沢すぎるわ。

巡査の初任給が一五円で、

銀行員は四〇円。

高等文官試験合格の高等官は七〇円。

議員さんの月給が二五〇円で、

知事さんは五〇〇円。

大臣さまでも千円よ。

お妾さんのお手当が月に三〇〇円で、

売れっ子の芸者は二五〇円。

カフェの女給は八円で、

女工の月給は、たった六円。

米が九銭。

卵は一厘八毛。

葉書一枚一銭五厘。

だのに五千匹のうつぼ。

風、花、月、溜息をつく。

画家

(福山に) どうしました。

学者

真耶さんの毒に当てられましたか？

福山、首を振って否む。

風

そう言えば、五美雄さんの姿が見えなかったわね。

花

あの子、まったく気心の知れない子だわ。

月

ほとんど口もきかず、遊びもせず、いつもひとりで何かを見つめている。

風

真耶さんとはばかり一緒にいたがって、離れているときは、こっちの心の

花

芯が冷えるように淋しそうな、そぶりをする。

月

もしかしたら、あの子。

花

えっ？

画家

恋をしている。

風

噂話はやめましょう。

学者

そうね。

花

送りますよ、帰りましょう。

画家

ええ。

福山

海鰻荘の聖家族はいつだって立入禁止なんだ。

学者

お先にどうぞ。ぼくはもう少し、こゝにいますよ。

それじゃ。

藤島、富川、風、月、花、帰って行く。

一人になると、

福山

ぼくの姉は、啞だ。だからぼくは、姉の唇の動きだけで、言葉を読むこ

とを覚えた。塚本剛造博士、その娘真耶。二人は、姉と僕のように唇の会話をしていた。にくい？と真耶さんの唇が言った。すると博士の顔が微笑でゆがんだ。にくい……。ころす？と娘が訊き、ころす、と父が答えた。いつ？こんや。これで終りだ。誰も知らない、誰にも聞えない、会話。笑顔で語られた、人殺しの企み。……どうすればいゝ？

海鰻荘奇談

と、上手回廊のドアが開いて真耶が出てくる。

真耶 誰？……ああ、福山先生でしたの？

福山 酔いをさましていたんです。

真耶 そうですか。

福山 あなたはどこへ？

真耶 プールに。

福山 プール？もう夜中ですよ。それに、プールには、うつぼが……。

真耶 知っていますよ。私は、海鰻荘の娘ですもの。

福山 ……まさか、うつぼのいる中で、

真耶 ええ、泳ぎます。だって、プールのうつぼたちは人間には危害を加えませんが、

福山 せんもの。

真耶 しかし……。

福山 李娥さんの話をお聞きになったんですね。

真耶 ええ。

李娥さんは、知らなかったんです。うつぼは毒のある魚と信じこんでいたんです。

父は、何も教えようとはしませんでした。

福山 なぜ？

真耶 その方が見て楽しいと思っていたんでしょう。そういう人なんです。

福山 真耶さん。

真耶 はい。

福山 謝らなくちゃいけないことがあります。

真耶 なんですか？

福山 僕は読唇術ができるんです。唇の動きだけで、何を言っているか、わかるんです。

真耶 ……あなたたちのように。

福山 だから？

真耶 ……。

真耶 そんなに怯えたような顔をなすって、おかしいわ。私たちは、言葉遊びをしていただけなんです。

福山 にくい？と訊くのがですか？ころす？と訊き、ころすと答えることができますか？

真耶 微笑ひとつで、人を殺すことだってできるんです。

福山 では、ただの戯れだったんですね。

真耶 ええ。

福山 安心しました。

真耶 それに、今、私が殺されたって、死ぬのは体です。

福山 怖ろしいことを。

真耶 あなたは、魂というものは信じてはいなくて？福山さん。

福山

魂。

真耶

ええ。

福山

わかりません。

真耶

体が死ねば、魂は生きはじめなんです。いえ、生きようとする魂は、と
いうことですけれど。

福山

ますますわからないな。生きようとする魂と、そうでない魂があるんで
すか？

真耶

激しい魂は生きるんです。意気地なしの魂は体と一緒に死ぬんです。
だったらきつと僕の魂は死にますね。

福山

意気地なしなんですか？

真耶

ものぐさです。生きてる間は、これでも懸命だが、死んでまで生きよう
とは思いませんよ、僕は。

福山

私は死んでから、ようやく生きようとするでしょうね。
それよりは、死ぬ前に生きようとして下さい。

真耶

それをお望み？
今日が初対面ですから。

福山

そうですね……。
一つ説教をさせて下さい。

真耶

なんですか？
真夜中に、うつぼと一緒に泳ぐのは、悪趣味ですよ。

福山

毎晩、泳ぐんです。そんなふう
に育てられて来たんです。
……枝から離れるのは、いつだ
って木の葉の方です。
親を捨てるのは、いつだって子
供だと言うこと？

真耶

福山
真耶

ええ。

父様は他人の子の私を捨てはしませんでした。だから私も捨てないんです。……
おやすみなさい。

去って行く。

取り残されて立ち尽す福山を闇が包んで行く。

溶明すると、舞台奥にはウォーターソファが置かれ、その前には硝子の戸がある。激しい雨音。

レインコートを着たず濡れの塚本が現われると、

塚本

これでいゝ。そう、すべての準備が整った。私は、あいつを今、解放した。十年の間、育てて来た、あいつを。……長かったな。二千フィートの海の底にもぐって見つけたとき、俺は狂ったように喜んだものさ。人間の体が耐え得る限界の水圧の中で私は何度も血を噴いた。口から、鼻から流れる血の中に見たのは、俺自身の憎悪だった。憎しみというやつは、まったく奇妙な情熱を生み出してくれる。私は、あいつと憎しみの糸を結び、今日まで育ててきたんだ。あいつ、ハイドラーナ・エレクトリクス。あいつは今、腹をすかせている。餌を待っている。もうすぐ、来るぞ、おまえの飢えを満たすものが、な。存分に喰うがいゝ。

狂笑し、ウォーターソファにすわる。

と、上手から真耶、下手から五美雄が現われる。

無言の歩行が長く続く。

光の帯で出来た道を歩き、中央の踊り場に来ると、抱き合う。

不意に稲妻。

と、四方から奇怪な魚たちが痙攣しながら現われて、のたうちながら真耶と五美雄に近づいて行く。

嵐。

塚本、驚愕して立上る。だが彼の前には硝子戸があり、踏み出すことができない。硝子戸にへばりついて虚しく温室内の出来事を見守るばかりだ。

魚郡にとりまかれる真耶と五美雄。

雷光が走り、やむと、切り穴から光の柱が立つ。

不意に哄笑する真耶。

姉と弟は抱き合ったまゝ、切り穴の中に消えて行く。

魚たち、跳ねる。

歓喜だ。

その姿が次第に闇に包まれて行く。

溶明すると福山が一冊のノートを読んでいる。

水槽テーブルの上には緑色の葡萄の盛られた硝子鉢がある。

水を抜かれた水槽の中に入っているのは、学生服の五美雄（幻）である。踊り場のあちこちに、黒い喪服を着た、風、月、花と辰爺がいる。

死んだ、わ。

ええ、死んだ。

死体は、なかったわ。

そう、ね。灰色のオイルシルクのような皮膚が、それだけがあった。

ええ、あった、わ。

人間の皮膚が二枚。

女たちの無表情な咬きを聞いて辰爺がぶるつと体を震わせ、

漁師

すっぱだかの人間の中身を、すっかり抜き取っちゃったあとに骨が皮を着てる、と言やあいいか。

その皮膚は、

ええそう、その皮膚は、雨に濡れてレバーソーセイジの色、してたわ。

その内側には骨以外何もなくて、

内臓はおろか、一滴の血も肉も、ありやしねえんだ。

まるで猫の舌で舐められたように、

ええそう、幾分の光沢さえ帯びて、艶めいて、

花 風 漁師 月 花 風

風 月 花 月 花 風

うつ伏せになって手足を、

ええそう、手足をのばし切っている様子は、

年格好十七、八の娘。

ええそう、乱れた髪が、そのままついていた。

それだけじゃねえんだ。うつ伏せになっている女の死体の下にもう一つ、男の子のよ、これも同様な袋にされた姿がくっついていて、

血と肉を吸いとられた、空っぽの袋の、

ひとつは、真耶さん。

一つは、五美雄。

ああ、やめてくれ。冥土の土産に持つてくもんが悪夢じゃ婆さんが、がっかりする。

四人、去る。

と、入れ代りに上手回廊に藤島、下手回廊に富川が現われる。

画家

自分の誕生パーティの夜、枯木も山のにぎわい連中のなかで、真耶さんは、妙にしんとした指で水蜜桃の皮を剥いでいた。アイスクリンの色の桃の果肉が、だんだん剥けて行く皮の下から現われるのが、酒で火照った眼にしてみた。……それが最後だったな。

やめてくれ。いくら言葉を費やしても、時間は逆まわりしやしない。

だから、狂った時計のように喋ってるんじゃないか、死人は喋らない。残された者は言葉を連ねるしかないのさ。死という事実に対抗するため

学者

どんな雲も裏側は銀色だと言って、自分も他人も慰めるつもりかい。だ

画家

画家

けど、誰がそんなことを喜ぶんだ？いくら銀色だからって雲の裏側など覗ける訳じゃない。

学者

裏側は銀色か……英語で言やあ、シルバー・ライニングだ。でもって、それは、希望のきざし、とも訳せる。

画家

やめてくれ。
やめるよ。

学者

俺はね、

画家

何だい？

学者

真耶さんが死んだ翌日、温室のプールに行つたよ。すると何に驚いたのか、うつぼが一匹跳ねた。水が飛んで僕の唇に触れた。

画家

それで？

学者

水は塩からかったよ。

画家

海鰻荘のうつぼは淡水にしか住めないように作り変えられていたんだろう。

学者

そうさ。

画家

一体何を言いたいんだ？

学者

鮒を塩水に放つと即、窒息死する。

画家

だから？

学者

今、海鰻荘にいるうつぼは、以前と同じものじゃないってことさ。プールの水は海水だつてことさ。いつの間にか、すりかえられていたんだな。

画家

俺には、わからん。

学者

俺にも、わからん。

画家

あんた、魚類学者だろう。

画家

俺は、覚えることをどこまで覚えられるか、験しているよ。簡単にいやあ、絵を描いている。これでも画家だからね。

二人が去って行くと、水槽の中の五美雄（幻）が

五美雄

真耶姉さんは、僕の本当の姉さんではありません。でも僕は姉さんが好きです。お父さんは姉さんを嫌いです。だから、僕は姉さんと遊ぶのは夜にしています。姉さんは、僕の言うことなら何でもしてくれます。香水をかけてくれという体中に雨のように浴びせてくれますし、みかんの酒が欲しいと言えば、あの美しい唇からくちうつしに飲ませてくれます。この間、姉さんは、ぼくにプールでとてもいゝことを教えてやると約束してくれましたから、僕はその日をとて楽しんでしています。

五美雄の台詞の間に、車椅子に乗った塚本が現われる。

福山

このノートをお読みになりましたか？
読んだよ。

福山

博士。
何だね。

福山

教えてください。
何を？

福山

なぜ、あなたは真耶さんを殺したんです。どうやって殺したんです。
私は真耶を殺してはいないよ。

福山

殺したんだ。（叫ぶ）僕は見たんですよ。誕生祝いの夜、あなたと真耶

さんは、唇で話していた。にくい？にくい？ころす？ころす？いつ？こ
んや。

博士 ……私が殺したのは、恵美だ。

福山 恵美さんは列車の事故で死んだ。

博士 真耶を殺してね。私は、恵美を殺すために真耶を育てたんだ。真耶は恵
美だ。

福山 殺したんですね。

博士 殺した。

福山 どうやって？

博士 ハイドラーナ・エレクトリクス。

福山 ハイドラーナ……？

博士 ハイドラーナ・エレクトリクス。

福山 ハイドラーナ・エレクトリクス。

博士 吸血する魚だ。私が作り出した魚だよ。だがこいつは海水にしか住むこ
とができない。私は、プールの水を入れ変えて、海水にし、ハイドラー
ナを育てた。知っているかね？
何を？

この世には血を吸う生き物たちが幾らもいる。吸血蝙蝠、吸血守宮。蚊、
蚤、蛙。だが、どれも人間一人を喰い尽くす程の力はない。では、八つ
目鰻はどうだ、ぬたうなぎは？だが、そのどちらも一匹の大きさが、せ
いぜい三百ミリ。胃袋の大きさが、しれてる。おあとは盲鰻だ。こ
いつは、天然のやすりのような舌を持っている。その舌で肉をむしり取
るようにして舐めあげる。だが、こいつも失敗したよ。

福山 それであなたは、ハイドラーナ・エレクトリクスを作り出した。

博士 失敗し、失敗して、十八年かかったよ。

福山 その傍らで真耶さんを育てた。

博士 十八年の間、ね。

福山 狂ってる。

博士 私がかね？私は正気さ。醒めた手と醒めた眼と醒めた心で娘と魚を育て

福山 たんだ。狂ってできることじゃない。

福山 狂ってる。

博士 なぜ。

福山 あなたは五美雄さんまでも殺した。

博士 五美雄を殺したのは真耶だ！

叫ぶ。

博士 真耶は殺されることを知っていた。私が教えた。私たちは約束したんだ。

互いに殺し合うことを。私はハイドラーナを育て、真耶は私を見張って、私の企みを知った。そして五美雄を道連れにすることで、私に復讐したんだ。真耶は笑ったよ。ハイドラーナが襲いかかる瞬間、私を見て、笑った。誇らし気に、高らかに、笑った。私は敗北した。真耶は、勝った。

福山、呆然として立ちすくんでいる。

博士 福山君、葡萄を取ってくれ。喉が乾いたよ。

福山、夢遊病者のようにひとふさの葡萄を取って、塚本に手渡す。塚本、ゆつくりと葡萄を食べる。一粒、また一粒……。

博士 君も食べたまえ。

差し出す。

福山、あやつられるように葡萄を食べる。

やがて、痙攣の発作を起こす、福山。

博士は、車椅子からころげ、崩れおれる。

闇が訪れる。

暗黒の中に、博士の音が響く。

博士

一房の葡萄。それが自殺の小道具だ。だが安心したまえ、君は助かるよ。そして私もまた、死なない。私には君の体が必要なんだ。私は、君の中でよみがえるために、私の体を殺したんだよ。

上手回廊に藤島が、下手回廊に富川がいる。
階下の海鰻荘は、ぼんやりとした明りの中に沈み、奇怪な魚たちがうごめいて、装置を変えて行く。

画家 その館を、人々は海鰻荘と呼ぶ、か。

学者 蘭の匂に満ちた天国が、最初の妻の裏切で地獄に変わった。

画家 変えられたんだよ。天国を作った男が地獄も作ったんだ。

学者 紫外線を滲透させる特殊硝子張りの水晶宮。つまりはそれが天国だった。

画家 それから、

そうそれから、水生羊歯が触手のようにはびこり、どくろ蛾が赤い鱗粉

をまき散らし、毒茸が悪臭のある粘液を滴り流す、地獄に変えられた。

学者 だがその地獄は地獄なりに、生き生きとよみがえった。

画家 ああ、二度目の妻のおかげでね。地獄の面差しを残して、ただの地上の

大温室になった。

学者 今は……、

画家 今は、二度目の荒廃だ。

学者 真耶さんは死んだ。五美雄君は死んだ。塚本博士は死んだ。そして誰も

いなくなつた。

画家 海鰻荘だけが残つた。春の真昼の、風のただ中で、音もなく崩れ散ろう

と戦く、去年の枝に残された繭の殻。

学者 プールには水もなく、ひび割れるまゝに亀裂が走り、みにくい苔がはび

こっているばかり。

画家
学者

寒いな。何だかひどく寒い。
ああ。

二人、急に無言になって、去って行く。
それと共に階下が溶明すると、風、花、月の三人が屍衣に似た衣裳をまとって、踊場のあちこちにうずくまっている。
水底を暗示する照明。
風が吹いて、風、花、月の衣裳は激しく旗めいている。

風、

風が、

風が吹いて、

風が吹いて、いるわ。

霧、

霧が、

霧が流れて、

霧が流れて、行くわ。

ゆっくり、

ゆっくりと、

ゆっくりと、海

ゆっくりと、海の

ゆっくりと、海の方へ。

滝、

滝を、

風花月風花月風花月風花月風花月風花月

花 風 月 花 風 月 花 風 月 花 風 月 花 風 月 花 風 月 花 風 月 花 風

滝を、なして、
水底、
水底に、
水底に、おりて、
水底に、おりて、行くわ。
風が吹いている、わ。
霧が流れて行く、わ。
ゆっくりと海の方へ。
滝をなして。
水底におりて行く、わ。
水、
水の、
水の迷宮、
水迷宮。
ないわ。
やわらかなランプの光の輪。
ないわ。
やわらかな暖房の火の揺らぎ。
なのに、
明るいわ。
光、
光の、
光の、洪水に、

風月花風月花風月花風月花風月花風月花風月花風月

光の、洪水に、染んで、
光の、洪水に、染んでいるわ。
金色の夏の夕暮れ。
水迷宮は光の洪水に染んでいる、わ。
いる、
いる、わ。
いる、わ、男。
いる、
いる、わ。
いる、わ、聞いて。
いる、わ、聞いて、いる。
記憶の耳をとぎすませて、
聞いている、わ。
匂い、
匂いが、
匂いが、ない、
匂いが、ない、わ。
血の、
匂い。
肉の、
匂い。
汗の、
匂い。

花月風 花月風 花月風 花月風 花月風 花月風

生きていることの、

証の、

匂いがない、わ。

出来事を孕んだ貝殻は、

夜を通して、また芽を出して、

生きてかえることができるのに、

男が偽りの洞窟に踏み込むと、

墮ちるわ。

だから、

だから、待っている。

女、

女が、

女が来るのを、

その光景はいつも、

水の薄絹に蔽われている、わ。

女たちが眩く間に、福山が現われる。

ゆつくりと切り穴が開くと、光の柱が立ちのぼる。

その中に藻のような衣裳をまとった真耶がいる。

福山

真耶

真耶。

私に聞こえるのは、あなたの声だけ。不思議ね。たった一夜、お会いし

ただけなのに。

想いの糸をつなげたんだ。

福山

真耶

福山

真耶

福山

真耶

福山

引き合つてこうして、私は来たわ。水底から、来た。

だのになぜ、死んだ？父へのろくでもない復讐の為に。

私は、そうする他に仕方がなかったの。自分でもわからないわ。ただそうせずにはいられなかっただけよ。

僕にはわからない。あなた以上にわからない。ただ……、ただ、なあに？

あなたが自分のいのちを弄んだことは、それだけは罪だ。

真耶、ゆつくりと笑う。

風が吹き、真耶の風がさやさやと揺れる。

真耶

(歌うように、うっとりとして) いのちをたもつのも、いのちをほろぼすのも、どちらもたのしいあそびだったら、ほろぼすほうをえらんだからといって、どうしてそれがさいあくなのかしら？

……。

来て。

行きたい。

こっちに来て。

行かない。

なぜ？

あれが邪魔をする。

五英雄のこと？

ああ。

あなたには邪魔なあの子。でも仕方のないことよ。私は、あの子に借り

真耶

福山

真耶

福山

真耶

があるもの。その借りを返すまでは、私は、あなたの、前に、私一人だけの姿では現われることができない……。知っている筈。

福山

真耶

そうよ、私たちの血と肉は、悪魔の魚の中でまじり合ってしまった。

福山

(呻くように) ハイドラーナ・エレクトリクス。

真耶

私はあの子を、果し得ない約束事で誘い殺した。今もあの子は、その約束事を私に果たさせようとして、私につきまとい、私を見張って離れない。

福山

やめろ。やめてくれ。

叫ぶ。

と、少年特有の哄笑が真耶の背から迸る。

その瞬間、戸板返しのように真耶がぐるりと背を見せると、藻の衣袂に隠れていた五美雄が現われる。

五美雄

いゝことを教えて下さい、姉さん。そうさ、僕は途中だった。いゝこと
のさなかに、魚が僕を喰った。僕は満足することなく、姉さんとまじり
合ってしまった。

果てることを知らずに……。恨みだけが残ったよ、姉さん。僕は中途半
端なんだよ。

福山

消えろ。

絶叫する。

光の柱が輝きを増す。
切り穴の中から水煙が噴出し、真耶と五美雄の姿は、その中に没して行く。
福山、崩れ折れる。
溶暗。

暗黒の中に突然、流れ星のような光がまたたくと消える。
それを合図に流星群の光が降っては消え、降っては消える。
その中で福山が奇怪な魚たちに弄ばれている。

福山 やめろ。やめてくれ。

魚1 どうした？

福山 棘の生えた夢が俺を刺す。

魚2 私を刺すんだ。

魚3 どうした？

福山 光のかげらが、俺の眼球をつき通して頭の中を引っかく。

魚4 私の眼球だ。

魚5 どうした？

福山 記憶の穂先が俺を突つく。

魚6 私を突つくんだ。

魚7 どうした？

福山 誰かが囁く。

魚8 私だ。

魚9 どうした？

福山 誰かが命じる。

魚10 私だ。

魚1 どうした？

福山 思い出せない。

魚 9 魚 8 魚 7 魚 6 魚 5 魚 4 魚 3 魚 2
魚 1 福山 魚 10 福山 魚 9 魚 8 福山 魚 7 魚 6 福山 魚 5 魚 4 福山 魚 3 魚 2

私を忘れる。
どうした？
なぜだ？
私だ。
どうした？
呼ぶな。
私だ。
どうした？
俺を私と言うな。
私はおんただ。
私はおまえだ。
違う。俺は、あんたじゃない。あんたは俺じゃない。
だったら誰だ？
わからない。
私だよ。
私だよ。
私だよ。
私だよ。
私だよ。
私だよ。
私だよ。
私だよ。
私だよ。

魚10 私だよ。
福山 消えろ。

叫ぶと魚たち、倒れ伏す。
明りがつき、福山が立上る。

福山 夢を見ていたのか？ だけど、俺は、まだ醒めてはいない。俺の中に、誰かがいて、その誰かは、絶え間なく俺を待ち受け、俺自身の先に立って歩こうとしている。あやつり人形、それが俺だ。だが、俺には、人形遣いが誰なのか、わからない。そいつは、俺を私と言う。

いきなり、からくり仕掛けのように魚1が立上ると、

魚1 私は行きたい。
福山 どこへ？
魚1 地の底へ。

魚1、跳ね動いて消える。と、魚2が立上る。

魚2 私は会いたい。
福山 誰に？
魚2 塚本真耶。

魚2が去ると、魚3が立上る。

魚3
福山
魚3

私は吸いたい。
何を？
パイプを。

魚3が去ると、魚4が立上る。

魚4
福山
魚4

私は飲みたい。
何を？
酒を。

魚4が去ると、魚5が立上る。

魚5
福山
魚5

私は読みたい。
何を？
魚類学辞典。

魚5が去ると、魚6が立上る。

魚6
福山
魚6

私は見たい。
何を？
海の中。

魚6が去ると、魚7が立上る。

魚7 私はしたい。
福山 何を？
魚7 研究。

魚7が去ると、魚8が立上る。

魚8 私は食べたい。
福山 何を？
魚8 葡萄。

魚8が去ると、魚9が立上る。

魚9 私は夢みたい。
福山 何を？
魚9 過去のある夜。

魚9が去ると、魚10が立上る。

魚10 私は名付けたい。
福山 何に？
魚10 私に私と。

魚10が去ると、福山だけが取り残される。

福山

私の欲望は俺を裏切る。俺はパイプを吸いたくない。俺は酒を飲みたくない。俺は魚類学辞典を読みたくない。俺は海の中を見たくない。俺は研究したくない。俺は葡萄を食べたくない。俺は過去のある夜を夢見たくない。俺は俺に私と名付けたくない。もう沢山だ。俺の欲望は俺から生まれて俺を動かす。俺を誘うな。

暗転。

富川と福山が、歩きまわっている。

時折、奇怪な魚たちが、思いもよらぬ場所から現われ、二人に気づくと慌てて逃げて行く。辰爺が酒壺を片手に魚たちを追う。舞台奥の高みでは、シャム双生児のようにくっついた真耶と五美雄が藻に似た衣裳にくるまって、階下の出来事を見おろしている。

わかつてはいるんだろう。

……

どうあがいたところで、生き身のお前と幻の真耶さんが一緒になれる筈がない。

富川さん。じゃあ、あんたは、真耶さんの幻が生きていることは認めているんだ。

嘲笑するように言う。それからふっと真顔になり、

そうだ、生きてるんだ。真耶さんは生きてる。それだけでいっんだ。

よせ。

怒鳴るが福山は耳を貸そつともしない。

福山

僕が呼びかければ、真耶さんはいつでも姿を現わし、話し、笑う。そんな時間と場所があるだけで満足だ。それ以上の望みは持つじゃない。

学者 それは解るさ。だが、危険だ。

福山 あんたまで巻き込んだりしないよ。それでいゝだろう。

学者 心配している。

福山 そいつはおせっかいかいってmond。

学者 まあいゝさ。俺は、

福山 何だい？

学者 ……海鰻荘を取りこわすことにしたよ。

福山 何だつて？

思わず叫ぶ。

それに驚いて辰爺がよろよろと近づいてくる。

学者 一万坪の敷地に、水族館を作る。

漁師 どうしたね。

福山 (虚ろに) 海鰻荘がこわされる。… (激しく) こいつがこわそうとしている。

漁師 仕方ないさ。先生さまは死んじまった。自分の手で天国と地獄を作つて、

さあて今は、どっちにいるか。

またフラフラと歩き出し、魚たちを追いかける。

学者 僕は、ハイドラーナをプールの下から掘してみせるよ。ハイドラーナ・

エレクトリクス。こいつは、地球上に存在する、ただ一匹の新しい種だ。

福山 それで？

学者 研究論文に添えて、標本をリンネ学会に提出する。学会に認めさせるんだ。

福山 ……（震えている）

学者 君には、俺の計画を拒むことはできないよ。俺は、君のために三年間待った。だが、あんたは飽きようとしな、忘れようとしな、幻とだけ遊んで。もうやめろよ。海鰻荘は俺のもので、おまえのもんじゃない。それでも俺が拒んだら？

福山 官憲の手にゆだねる。気違い病院に放り込む。手段はいくらもある。僕は、塚本博士の後継者だ。

福山 法律、という奴か？

学者 そうだ。（激しく）海鰻荘に関する限り、今後一切、君の干渉を許さん。そんなことはさせない。海鰻荘が荒廃し尽して自然に崩壊するんなら、我慢できる。ハイドラーナ・エレクトリクスが、老いさらばえて死に果てたんなら、忘れよう。だが、その二つを他人に奪われるのは、嫌だ。真耶さんを殺す気か？

福山 彼女は死んだ。

学者 生きてる。こゝに生きてる。だが、今は現われやしない。あんたがいるからだよ。海鰻荘、そしてハイドラーナ。それを失なえば、僕は真耶さんを失なう。真耶を？失なう？この僕が、もう一度、真耶を失なう？真耶の肉体を失なった次には、その魂までをも失なう？真耶の肉体を奪ったのは父親だ。真耶の魂を奪うのは、きさまだな、富川孝一。

福山は富川を刺す。刺し殺す。

「人殺し！」辰爺の絶叫が響く。

福山、逃げ出す。

と、上手回廊に藤島が姿を現わす。

福山、上手回廊に走り出て来る。

探してたんだよ。

……

今まで、君の下宿で待つてたんだが、帰って来ないんであきらめていたところさ。ちょうどよかった。

何か用が？

これだよ。

小脇に抱えていたものを渡す。
絵額である。

福山 ……真耶さん。

画家 満更でもなかるう？実の所、僕だつて手放すのは、ちょっと惜しかった

よ。ぼくかなりの傑作だと思つていたからね。だが、富川がうるさくてね。

富川さんが？

ああ。これを君にやれと言つてきかないんだ。福山の奴、真耶さんの死
霊にとつつかれて、半気違いだ、と言うんだよ。怒るなよ。

ああ。

せめて、真耶さんの肖像画でも部屋に飾らせたら、君の頭の調子も元に
戻るだろう、と富川は考えたらしい。

福山

……

画家

本音を吐くと俺は、これを少々もて余してもいた。

福山

なぜ？

画家

近く、恋女房を貰うことになったんでね。

福山

そうか。……藤島さん。

画家

何だい。

福山

ありがとう。あんたにだけは礼を言う……。富川さんは許せないが。

画家

そう富川を恨むなよ。奴さんだって、根っからの悪じゃないさ。それじゃ。

藤島、去る。

福山は回廊に立ち尽して、真耶の肖像画に見入っている。だが、

福山

これは真耶じゃない。違う！こいつは話しかけることも訴えることも知らん、ただの絵だ。真耶じゃない。真耶じゃない。真耶じゃない。

眩き、言い、叫ぶと、ついさっき富川を殺したナイフで真耶の絵を切り裂くと、そこから血が「る。

暗転。

暗黒の中に回廊で振られる二つのカンテラの赤い光量がきらめく。その光が、回廊で横一直線にまじわると、互いのカンテラの中に、藤島と辰爺の姿が浮かびあがる。

画家 いたか？

漁師 いねえ。

画家 いる筈なんだ。あいつが来る所は、こゝしかない。

漁師 富川主任は、遺書を残していたそうだね。殺されるのに遺書とは御苦労
さまなこった。

画家 「ぼくは殺されるかも知れない」と書いてあったよ。「近く、不慮の死を
遂げるであろう予感をこのメモに託して、死人の口の代弁とする。もし
僕が、多少とも疑わしい死因をのこして他界した時、それは、僕に恨み
を抱いている男の犯行と見なして誤りはない。その男の名は、福山清」。
それで？

漁師 えっ？

画家 なんで福山さんを探すのかね？

漁師 ……福山は人殺しだ。

画家 ああ、そうだ。

漁師 探して、自首をすゝめる。

画家 余計なことじゃないのかね？

漁師 なぜ？

画家 世間だの、巡査だの、そんなもんが入り込めないとところに、みんないる

画家 漁師 画家 漁師 画家 漁師 画家 漁師 画家 漁師 画家 漁師

画家
漁師
画家

わからない。ただ、

ただ？

僕は画家だからさ。

藤島が言った瞬間、カンテラの光が消え、瞬間的に闇となる。

その中に、悲鳴。藤島と辰爺が叫び、同時に平手打ちの明りがつく。海鰻荘の地下世界。

そこには、巨大な燻製じみた鰻型のハイドラーナ・エレクトリクスの胴体に背をもたせかけた真耶と福山がいる。

回廊から宙に吊り下がった、藻のブランコには藤島と辰爺がしがみついて、地底

(中抜け?)

おろしている。

福山

ようやくこゝを手に入れた。この海鰻荘を。僕が主人だ。これでもう、

真耶

あなたを失わずにすむ。あなたを誰の手にも渡さずにすむ。

福山

どうしてあなたが主人に？
富川孝一を殺した。

真耶、不意に笑う。

真耶

同じ殺すのだったら、この怪物を殺して下さればよかったのに。この悪

福山

魔は、あの夜以来、飲食に満ち足りて眠りつづけているのよ。そいつを殺したら、僕は、あなたを失なう……。

真耶 あなたが自分で、そう思い込んでいらっしやるだけよ。私は、いつだっ

て、この地の下の洞穴に住んでいるわ。

福山 ここに……。

真耶 ええ、こゝに。でも、ほかでは駄目。

福山 僕がこゝに来さえすれば、

真耶 ええ、会える。

福山 では、海鰻荘を無理にぼくのものにしなくても？

真耶 あなたの思いすごし。たとえ……、

福山 たとえ？

真耶 建物は人手に渡っても、この深い深い地の下の洞窟がある限り、あたし

たちは会う事ができる。たとえ、

福山 たとえ？

真耶 ハイドラーナがいなくても、

福山 会うことができる。

真耶 できるわ。私が望んでいるのは、ハイドラーナの中にいる、あたしでは

もうひとつのものを追放したいということだけ。

福山 五美雄……。

真耶 そうよ、私の弟。

不意に切り穴から、五美雄が現われる。それと共に、吹きあげてくる七彩の泡。五美雄の体は、それと戯れるように、ゆらゆらと揺れている。

真耶 私はあの子を愛してはいない。ただ復讐の道具に使っただけ。なのに、いつまでもあの子は私につきまとう。この怪物が、死なない限り。私と

私には、あの魚を殺すことができない。
なぜ？

目の前に見えていながら、私の指は届かないもの。この魚は私の住んで
いる世界のものじゃないもの。

僕の世界のものだと……。だから、僕には、殺すことができる、と。
ええ。

僕はナイフを持っている。
殺して。

富川孝一を殺したナイフを持っている。
殺して。

真耶さんの肖像画を切り裂いたナイフを持っている。
殺して。魚を殺して。それが証しよ。あなたの恋の証し。そのあとで生
きていることが私の恋の証し。

福山、ゆっくりと立上る。

そして、ハイドラーナに深々とナイフを突き立てる。
と、真耶の体から血が噴く。
泡に包まれてのたうつ、五美雄。

福山
真耶さん。

絶叫する。
真耶、笑う。狂笑だ。

真耶

これが私の二度目の復讐。私は、父にもう一度、苦痛を与えた。今度は、あなたを道具に使ってね、福山さん。

福山

なぜ？

真耶

私は五美雄の魂を生かしておきたくなかった。父から、奪いたかったのよ。私の父、塚本剛造。私を憎むのと同じ重さで、五美雄を愛した男。私を殺そうと企み、弟の命を守ろうとした男。私には毒を弟には蜜を与えた男。自分の罪に泣くがいゝ。

水煙が吹き込んでくる。

福山はハイドラーナによりかかって倒れ伏す。と、ハイドラーナの腹中からは、塚本が現われる。

真耶

父様。

博士

そうだ、私だ。

真耶

生きていた。

博士

この男の体を借りてね。

福山、痙攣しながら体を起こす。

福山

俺の、体の中で、囁く声があった。命じる声があった。会いに行けと、

真耶さんに会え、と。

博士

おまえは真耶に会いたがっていた。私はその欲望の中にすべり込んだの

さ。

福山

なんのために。

博士
真耶
博士
真耶
博士

おまえなら、真耶を抱くことができる。
それが、あなたの復讐？

違う。

では、何？

欲望だ。ハイドラーナがおまえたちを喰った夜、私はすべてを見ていた。
私の全身は硬直し、網膜には五彩の星が飛び散った。眼球が碎けて、粉々に飛散するかとさえ思った。その時、私には、わかったんだ。

真耶と福山、同時、「何が？」と訊く。

博士
真耶
博士
真耶
博士
真耶
博士
真耶
博士
福山
真耶
福山
博士
真耶
福山
真耶

私はお前を愛していた。

愛していたのは、私よ、父様。

私たちは父娘だった。

でも、血ではなかった。法律だった。

お前は私を裏切った女の娘だった。

私は母様ではなかった。

馬鹿げている。

そうだ。何もかも馬鹿げている。

手遅れだよ、もう。

何故？

俺たちは、もう死んだ。

死んだのは、体よ。

ハイドラーナの中でまじり合っていた五美雄と私の血と肉はようやく

福山 死んだ。今は、霊魂だけが生きています。

博士 そんなものが、何の役に立つ？

博士 許すことの……。

真耶 ええ。

博士 真耶。

真耶 はい。

博士 お前は間違っていたよ。

真耶 何を？

博士 ハイドラーナの中で、血と肉をまじり入らせる相手は、私でなければならなかった。

真耶 そうね、多分。そうすれば多分、私たちは幸福になることができたのでしょうね。

福山 どこまで間違い探しの昔を辿れば気がすむんだ？一人の男が一人の娘に出会った時までか？塚本剛造博士、あんたは、おろかな男だよ。他人の男の子を孕んだ娘を妻にしたんだからな。それが最初の間違いだ。だが、あんたには許すこともできた筈だ。

博士 ああ、多分。体というのは厄介なものだ。血と肉は、時々、人を盲目にする。

真耶 間違つて生まれ、間違つて生き、間違つて死んでようやく、間違いがわかる。でも私は生まれて来たことを後悔してはいなくてよ。

福山 なぜ？

真耶 忘れたの？

福山 何を？

真耶 私は、言ったわ、もう。

福山 教えてくれ、もう一度。

真耶 いきることもしぬことも、それがたのしいあそびだったら、しぬことのほうをえらんだからといって、どうしてそれがさいあくなのかしら？あ

たしは……、

福山 あんたは？

真耶 ようやく生きようとしているのよ。体は子を産むわ。でも魂は、私限りのもの。私は誰にも血をつなげたくないの。生きることが一人占めした

いのよ。

体なしに何ができる？

遊ぶことが。

福山
真耶

真耶、塚本を見る。

真耶 いらっしやい、父様。

博士 ああ、行こう。

真耶、五美雄を手招く。

立上る、五美雄。

真耶 いらっしやい、五美雄。

五美雄 はい、姉さん。

真耶、福山を凝視する。

真耶 いらっしやい、福山さん。

福山 ……嫌だ。

真耶 生きたくはないの？

福山 このまゝ死なせておいてくれ。

真耶 いつまでも生きることができないのに。あなたには、死後の生を生きるだけの欲望もないの？たかが体の欲でしか生きられないの？

福山 たかが体、されど体、さ。俺の体は、もう死んだ。このまゝでいゝ。

真耶 かわいそうな人。これからは、どんな交わりもできるのに。

福山 あんたの体に生きていて欲しかったよ、真耶さん。俺の子の母になって欲しかった。

真耶 ……さようなら。

福山 死人同士のさよならだ。

真耶 私は、選んでしまったの。

福山 俺も、選んでしまった。……さよなら。

真耶、塚本、五美雄、ゆつくりと去って行く。

さしこんでくる逆光の照明。

三人の姿は、その光の中に吸い込まれて行く。

福山

行きたいよ、真耶さん。だけど、俺は行かない。生きることとは一回こっきりの時間。死ねば終り。それが俺には、しみついてしまっている。永久を手に入れることが怖いんだ。意気地なしで結構。俺は、もう眠りたい。

福山、ゆっくりと崩れ折れて行く。
と、真耶が高みに立ち、

真耶

踊って、魚たち。

叫ぶ。

なだれこんでくる音楽。

荒れる海の音。

その中に、次々と奇怪な魚たちが現われて跳ねる。

真耶

私はたった今生まれた子供。生きつづける女。私は光。まきちらされる光。光の子供。私は風。やさしさもためらいもなく吹く風。私は水。流れつづける水。私はすべての中にいる私。福山さん、死人の生を生きてごらん。私はどこにでもいる。あなたが吸う空気の中に、あなたが吐く息のなかに、私はもういるんです。

暗転。

溶明すると、風、花、月が踊り場の三方に座っている。

匂い……。

乳の……。

した？

ええ、した。

たった今、鼻の奥に。

それから、体中に。

匂い……。

乳の……。

した？

ええ、した。

何かしら、これ。

両足の間で、うづくもの。わからないわ。でも、

でも？

なつかしい、匂い……。

乳の……。

した？

ええ、した。

体中に、体ができかかりの予感。

違ういのちが肉に包まれてゆくのが、わかる。

風月花風月花風月花風月花風月花風月花風

風月花風月花風月花風月花月花風月花風月花風月花風月花

日一日と骨ができ、
目鼻がついて、手足。
できた？

できたわ、あんたは？

髪の毛が生えたわ、それから爪。ええそう、爪が生えたわ。
クッ！（と笑う）

どうしたの？

蹴ったわ、私のおなかの壁を。

クッ！（と笑う）

どうしたの？

命じているわ。

何を？

おなかですいたと訴えているの。

いのちといのちがつながった管の中を、血が駆け下ってゆく。
と、飲む。あの子がね。

私が食べるもの全部、血になって、

吸われてゆくわ、あの子に。

ねえ……。

何？

おなかすかない？

すいたわ、とても。

私たち、

えっ？

